

孤立死を迎えないために 今、私たちはどう生きるべきか

キーパーズ有限会社代表取締役 吉田太一（よした たいしち）

吉田太一さんは年間一五〇〇件を超える遺品整理を行っています。そして、その多くは「孤立死」の現場です。今や孤立死は高齢者だけのものではありません。孤立死にならずに人生を終えるための提言です。

孤立社会へ向かう、日本の危機

年に五〇回以上にも及ぶ私の講演会には、毎回定員を上回る聴講者に足を運んでいただいています。民生委員や社会福祉協議会の方、包括支援センターの職員など、福祉に関わる方々が多いのですが、一般の方も大勢来られます。そしてその多くが、高齢者なのです。「本当のひとりぼっちにならないために」遺品整理の現場から学ぶ」というタイトルに関心を持つ高齢者が非常に多いという事が、今の社会背景を如実に物語っているのかもしれない。

家制度の崩壊、超高齢社会、核家族、女性の自立、未婚率の増加、少子化等の社会状況もあって、急性に単身世帯が増加しています。高齢者自身も「孤立」に対する不安がものすごくあるのだなあ、と感じます。

私は今まで一万余千件にも及ぶ遺品整理の現場に伺い、遺品整理のお手伝いをさせていただき、そして多くの事を学ばせてもらっています。現場には、故人の生き様が遺されておき、一度も会った事のない故人がどのような人生を歩んで来られたか、そしてどんな思いで現代を生きてきたのか、よく

分かりますし、その方の好みや性格までも知ることが出来ます。そして無意識に「こんなふうになりたくないな」と考えてしまうような、悲しい生き様もたくさん見えてきました。そこから学んだことの多くは、現在の私の生き方にも大きな影響を与えてくれています。

遺品整理の現場を通し実際に体験してきた多くの事柄が、自分の今までの生き方を振り返らせてくれ、今後どう生きるのかを考える重要な判断の指針となっています。きつと、こんな実体験に基づいた話をする人が、今まではいなかった。なので私の経験談に関心を持たれる方が多いのかもしれない。

遺品が語る故人の生き様とは

私の仕事で、故人の生き様がなぜよくわかるのでしょうか？ それは室内には遺品といわれる故人が長年愛用していた家財道具が、そのまま残されているからです。例えば、故人はいつもの部屋のどのあたりに座っていたのか、どんな趣味を持っていたのか、どんな色が好みでどんなファッションが好きだったのか、どんな仕事をしていたのか、どんな食事が多くて、お酒よりビールが好きだったのか、また友達が多かったのか少なかつ

たのかなど、遺品が教えてくれる「故人情報」はすべて現実であり、とても重要で、生きている人の個人情報より素直な情報なのです。

遺族からの依頼を受けて現場に行き、遺族の代わりに室内のあらゆる遺品を一つひとつ確認しながら整理していくという重要な役割を担うのが遺品整理専門業の仕事です。そして故人の生き様をいねいに片づけて消し去る事によって、故人がこの世を綺麗に終わらせる事が出来るのです。

また、ひとり住まいの部屋には、誰も知らない事実が数多く隠され、秘密がそのまま残っていることもあります。このような場面では、遺族が知らない故人の思いなどを知り、その思いを遺族に伝え、途切れかかっていた家族の関係を繋ぐ役割を果たす事になります。

しかし、なんでもすべて伝えるわけではありません。真実であっても遺された遺族が事実を知らないままの方がよいこともたくさん

あるので、そのような場合の配慮は必要です。

孤立死が本場に社会問題なのか

私が遺品整理会社を日本で初めて創業した当時、国内では「孤立死」や「孤独死」といった言葉が社会問題としてメディアに頻繁に取り上げられました。そしてこの数は年々増加しているといわれ、実際に私どもにも年間二〇〇件以上の、凄惨な現場の遺品整理の依頼があります。室内で亡くなった方が誰にも気づかれず発見が遅れてしまい孤立死に至ってしまった現場は、不動産価値の低下だけでなく近隣住民への精神的悪影響や、トラブルなどさまざまな問題を含まれており、そのような事が起こらないための対策も重要になります。そのために、各自治体や社会福祉協議会などが孤立死を防ぐ活動として訪問による見守りや孤立死ゼロ運動などを実施しています。このような取り組みが全国で広が

り、地域や団地単位ではある一定の成果も出てきているようです。

しかし、この活動だけでは将来に向けた本場の解決策にならないという事を認識しなくてはなりません。本場の問題とは「孤立死」ではなく、社会から孤立していく単身世帯の増加という事を認識しなければなりません。そしてこの「孤立化」は、日々ものすごい勢いで増加し続け、日本の人口構造に変化を与え、社会生活のスタイルを大きく変えています。

「孤立社会」という恐ろしい現実

現在、適齢期男女の未婚率が著しく増加しており、また未婚者の多くが兄弟のいない一人っ子の割合が多いのです。一人っ子が自由で便利な時代に育ち、親に甘やかされて育つと何が起りやすいのかは皆さんも簡単に想像できますね。このような若者は、人間関係の煩わしさをすべて回避してしまう、自己中心的な性格に陥りやす

い環境で育ってきたという事なのです。

仮に兄弟のいない一人っ子が、未婚の状態でも両親を亡くしたらどのような事になるのでしょうか。自分の死後、遺族を残さない事が確定している人間が増加するという事なので、本来身内がいて遺族が残る事を前提に存在している機能や考え方が通用しません。

要するに、今まで当たり前とされている生活スタイルや考え方が通用しない人間が増加しているのです。人間関係の重要性を理解し、保ち方や修正のしかたなどの訓練を受けていない大人が増加すると、完全に協調性の希薄な「孤立社会」となってしまうのです。NHKで放送された「無縁社会」よりも恐ろしい「孤立社会」に、確実に近づいているという現実を、このような社会を創った団塊の世代前後の人たちや五〇歳代以上の皆が直視しなければなりません。そして、現在未成年の人たちが五〇